

## 宮本 輝 「螢川」 論

藤 村 猛

### はじめに

宮本輝が「螢川」で芥川賞を受賞したのは、昭和五十三年であった。選評には「螢川」の持つ叙情性と「古さ」の指摘があった。前者は、「はじめから一種の叙情性がみなぎっていて、それが結末の川の螢の描写で頂点に達します。」<sup>(1)</sup>（中村光夫）という一文に、後者は、「何処と違って新しさがあるわけでもなく、感受性の若わかしさが感じられるのではない。」<sup>(2)</sup>（安岡章太郎）との如き批判に代表される。後者の批判に対して、宮本輝は「もう一度『螢川』を読み返してみ、これはこれでなかなか新しい小説ではないかと臆面もなく自惚れてしまいました。」<sup>(3)</sup>（受賞のことば）と反論する。この点は鎌田均氏も言うように、この作品は「生まれるということ、生きるということ、しあわせになるということ、そして死ぬということ。人間におけるこの最大の難問を現代という時代に突きつけ」<sup>(4)</sup>ていて、かくの如き視点から言えば古さも新しさもない。が、発表当時から言え、作品の時間―昭和三十七年―は十六年も前であり、昭和五十三年の時代の特色や事象を描いた物語とは言い難いのも事実である。

「螢川」は、中学二年生の竜夫と母・千代を中心とする物語であり、二人を取り巻くのは竜夫の父・重竜や友人の関根圭太、そして恋人の英子たちである。関根圭太を除けば、二組の男女―千代と重竜・竜夫と英子―の物語とも見なせるし、英子を除けば、父・母・子の家族の物語とも言える。これは作品の成立状況とも絡む問題でもあり、「螢川」の初稿では、「思春期の性のめざめと父殺しが結合した、異常な少年の物語」<sup>(5)</sup>（渡辺善雄氏）であった。が、その後、「さりとしたものに改められ、竜夫の異常な感覚も消され」、「重竜と千代を中心とした大人の物語が加わ」<sup>(6)</sup>（渡辺善雄氏）った。つまり、「異常な少年の物語」から、「さりとした」少年の物語になり、「大人の物語」が加わったのが、現在の「螢川」である。

作品は、昭和三十七年三月から六月までの出来事―重竜の事業の失敗や死、友人の関根の事故死やその父の発病、銀三や英子たちとの螢狩りなど―に、登場人物たちの回想―千代の最初の結婚や、戦後の重竜との出会いなどの回想―が挿入される。

舞台は富山市で、「いたち川」などの北陸の自然や風土が、そこで生きる人々の哀歓を印象的に彩っている。

酒井英行氏は、この作品の「大きなテーマは、人生の重み、哀し

みを内包しつつ生きる人間たちの〈人間愛〉である<sup>(7)</sup>とし、安藤始氏は「母と子の双方から見た死と別離を中心とした宿命の物語<sup>(8)</sup>」とする。また、渡辺善雄氏は「雪」「桜」「螢」の三章から成り、早春から初夏へ季節のうつろいとともに生と性と死のドラマが展開する<sup>(9)</sup>」とする。

「人間愛」・「宿命の物語」・「生と性と死のドラマ」、いずれも作品の特性を示しているが、それらがどう絡み合うかが問題となる。端的に言えば、作品には親子愛や男女の愛も描かれ、それらが生や性によって発動し、死や別離によって深まり、主人公たちに宿命として感知される。

また、作品の構成を見れば、作品の章題「雪」・「桜」・「螢」の「三つの名称が、母と子の内に生じる変化の代名詞になっている<sup>(10)</sup>」とし、「この小説の狂言回しの役にもなっている<sup>(10)</sup>」（安藤始氏）る。言うまでもなく、「雪」・「桜」・「螢」は日本の美の代表であるが、この作品の美は、単純に存在している訳ではない。その典型として、作品最終場面の螢がある。螢の群舞は美でありながらも、不気味さや死を内包している。（同様なことは、英子にも当てはまり、美しさとともに「何か恐ろしいもの」を、彼女は持っている。）

本稿では、竜夫と千代を中心として、彼らの心情や生き方を事件や自然と絡めて考える。まずは、作品中の時間の流れの特色を押さえ、二組の男女の物語を考えていく。そして、生・性・死・美がどのようにドラマとなり、「愛」や「宿命」として描かれるのか。特に、作品最終部の螢狩りは、登場人物たちの生や性、そして死や美を際立たせている。

## 一 時間の流れ——過去と現在——

作品の時間は昭和三十七年であり、千代たちの回想や経験談が織り込まれ、進展していく。それが分かりやすい二章「桜」を、まず見てみる。

二章は、父の病気によって借金をするために、竜夫が父の旧友・大森を訪ねるシーンから始まる。竜夫は大森に会い、彼の好意により、無利子・無期限の借金に成功する。その後、場面が息子を心配する千代に変わる。彼女は市電で病院に向かっていたが、途中下車して、お城の石垣で「三十前後の和服の女」を見かける。

（前略）女の羽織に描かれている水仙らしき小さな花の、曇り空の空の下に淡く浮きあがった黄色い居並びが、千代の心にふいに沁み入ってきた。  
（「桜」）

男を待つ女の姿が千代に、「十五年前の冬」の「富山駅の待合室で重童を待っていた」こと、また、女の羽織の水仙が重童と行った越前岬を連想させる。

その後、女の「子供が熱を出して……」という言葉と赤ん坊の泣き声から、十五年前の夜汽車の中での赤ん坊の泣き声を思い出し、重童との越前行きが回想される。

それが終わると、また現在に戻り、千代は市電の停留所に急ぐ。

振り返ると、さっきの女も男と一緒に走ってきていた。二人は千代と同じ市電に乗り込み、息をはずませて千代の横に並んだ。

（桜）

この二人の姿は、過去の自分たちの姿でもある。このように過去と現在が入れ替わり、連鎖的に描かれる。偶然が続くものの、時間の幅を持ち、彼女の心情が巧みに描かれる。

一章「雪」でも回想を用い、現在と過去が交錯・進行していく。市電で病院に向かう千代の前に、行商人の老婆が現れ、「老婆のゴム長にへばりついている鱗」の光から、十五年前の夜汽車内の「行商人風の女のゴム長」の「鱗の光」を連想し、「それは、重竜の子を宿したその夜の寒々とした暗闇に繋がっていく光」へと繋がる。

同様に小道具を用いて、過去と現在を結びつける。例えば、大森の見せる「セピア色の写真」（四十八年前の十八歳の重竜との写真）は、重竜の過去と竜夫の現在（未来）を繋ぐ。（竜夫は過去の父に、未来の自分の姿を見る。）

竜夫はその坊主頭の若者に見入った。確かに、自分とよく似た顔立ちであった。春光の下で、十八歳の父はまぶしそうに目をしかめ、その肌は白く輝いていた。

（桜）

また、友人の関根が盗んだ英子の写真も、同じ働きを持つ。写真の英子は「実際の英子よりもっとおとなびて美しいように思え」（雪）るが、蜩狩りに誘う時、彼女は写真のように変貌して、「ひ

どくおとなびて」（蜩）見える。

以上のように、回想や小道具をうまく使い、時間の流れとともに、登場人物たちの心情や場面が巧みに盛り上げられている。

## 二 千代と重竜の物語——結婚まで——

「蜩川」では、千代と重竜の夫婦の物語と、竜夫と英子の初恋の物語が語られる。時間の幅を持つのは前者である。

千代と重竜の物語は、主に千代の回想で語られる。具体的には、彼女の最初の結婚と重竜との出会いや越前旅行である。

千代は最初の結婚相手（酒乱）を嫌がり、一歳の男の子を残して離縁する。その後、「当時北陸道でにわかになを知られ始めた水島重竜と知り合」う。やがて二人は恋に落ち、福井・越前岬へと旅行する。

福井で泊まった夜、重竜は芸者を呼び、盲目の芸者の烈しく弾く三味線を聞く。

そしてまた烈しく弾き始めた。怖気だつほど澄んだ音色であった。いつしか千代は盲目の女の奏でる暗く力強い音調の中にひき込まれていった。重竜も千代の足首を握ったまま、女の撥さばきに視線を投げていた。（中略）

黄色い電灯の光が、三味線の音とともにじわじわ薄暗くなっていった。一滴だと透明なのに、むつみ合うと鉛色になる——盲目の女の手首の一振り一振りは、越前の海の雫に似て、この肌寒

い部屋の空気をいつそう暗い冷たいものに変えていった。

〔桜〕

三味線の音色を通じて、男女の複雑さが暗示される。男と女は、「一滴だと透明なのに、むつみ合うと鉛色になり、部屋の空気のように、「暗い冷たいもの」を潜ませる。

この三味線の音は、翌日二人が行った越前岬でも、海鳴りとともに聞こえる。

濤声の中から、千代は三味線の響きを聞いた。海鳴りかと聞き耳を立ててみた。波に向かって切り込む風が、偶然に作り出す擬音なのか……

三味線の音が聞こえると重竜に言うと、

「おう、確かに聞こえるのお」

と重竜も言った。二人は海を見た。

〔桜〕

このような印象的な場面の後、千代は竜夫を身ごもる。五十二歳で子供を持つ事になった重竜は、長年連れ添って来た妻（春枝）に大金を渡して離縁し、生まれる子供のため、千代と結婚しようとする。そんな重竜に対して、千代は次のように思う。

ただ妻を捨て、家屋敷を捨てても、自分の夫になろうとした五十二歳の男に対して、千代は一種の恐ろしさに似たものを感じたことを覚えている。子供を捨ててまでも夫と別れてきた女が、

妻を捨てても子供の親になりたいという男のもとに嫁いだのである。

〔桜〕

千代は重竜に、「一種の恐ろしさに似たもの」を感じる。後に重竜は竜夫に、当時の心情を語る。

わしは子供が欲しくて欲しくてたまらんかった。そのときわしが三十なら別の方法を取ったかもしれんちゃ。なん、五十二やからできた氣違い沙汰よ。……

〔雪〕

初老の男が皆そうなるのではなく、重竜は自分でも言うように、狂気に取り憑かれている。だが、千代に対して愛情がないわけではない。

千代は折りにふれ、あの越前岬での会話を思い出す。

「越前岬に行きたい言うたがでないが」

「なァん、越前に行きたい言うたがやっちゃ」

そして、越前の荒海と逆巻く牡丹雪の中から漂うかすかな三味線の音を、互いの耳が聞きとっていたことを思うのである。

〔桜〕

三味線の音は、螢の群舞の場面でも登場するが、二人の絆や性を表している。

## 三 千代と重竜——結婚と重竜の死

その後二人は一緒に暮らし始め、ある朝、重竜はつわりで苦しむ千代を見る。

裸足のまま雪道にとびだして覗き込むと、川岸で千代が苦しうに吐いた。悪阻がきつうてきつうて、瘦せて小そうなた千代の体が、気味悪うに蒼光りしとるがや。しゃがんで川の中に吐いとる千代を、わしは長いこと見とった。黒うなったり、蒼うなったりしながら、川の面と千代の体が、確かに光つとちたちゃ

〔雪〕

女の体が光ることはなく、川の光の反射による。この時の千代を酒井英行氏は、「川岸で点滅する千代、それはまさに蜚と言う他あるまい。民話風に言えば、蜚女、千代は蜚の化身である。産む性としての千代は、喜びと哀しみを背負った蜚なのである。」とする。これは、作品最終部の蜚と一体化した英子と照応していよう。だが、問題はその時の千代のイメージであり、それを見た重竜の発言——「わしはまた自分の本心がわからんようになったがや」——である。

重竜は千代への愛情はあるが、「気味悪うに蒼光りしとるがや。」や「しゃがんで川の中に吐いとる」にはいいイメージ・感情はない。むしろ、蜚狩りの時、成熟していく英子を見る千代の次の感情に近い。

楽しそうに銀蔵に問いかけている英子のすつかり娘らしくなった胸や腰を見ていると、千代はそこに何かしら恐ろしいものを嗅ぐような気がして目をそらしてしまった。

〔蜚〕

千代に「何かしら恐ろしいものを嗅ぐような気」が、重竜もしたのではないか。子への執着心を自覚しつつも、生命を産み出す女の持つ性には、負のイメージ（果てには死のイメージ）がある。その影の面は、作品最終部の蜚の乱舞に象徴的に表される。

蜚の大群は、滝壺の底に寂寞と舞う微生物の屍のように、はかりしれない沈黙と死臭を孕んで光の澱と化し、天空へ天空へと光彩をばかしながら冷たい火の粉状になって舞いあがった。

〔蜚〕

蜚の大群は、「はかりしれない沈黙と死臭を孕んで光の澱と化」す。悪阻で苦しむ千代と、イメージ的に繋がっている。

こういう負のイメージを受けてか、竜夫の回想——小学生前、まだ重竜の事業がうまくいっている頃、家族で見たサーカスの思い出——では、千代たちはいい夫婦ではない。

サーカス見物のあと、親子は西町の食堂で食事をした。何かのやりとりのあと、重竜が千代をなぐった。みんなしんとして親子を見つめていた。千代はうつむいて辛そうに笑っていた。竜夫は黙って父と母を見やった。また重竜が千代をなぐって立

ちあがった。

〔雪〕

「前夫の悪夢の再現。男の下敷きにならざるを得ない哀しみ。男気に富む重竜への信頼だけが夫婦生活の支えであつたろう。」<sup>(12)</sup>（酒井英行氏）千代の悲しみがうかがわれる。

だが、千代と重竜の生活は、彼の死で断ち切られる。重竜は死に際に、「……はる」と言い残す。（前妻の名前が春枝である。）

千代の体に絞りあげられるような痛みが走り抜けた。とめどなく涙が溢れた。千代は夫にしがみつき、「心配いらんちゃ。何も心配することないちゃ。春枝さんは、商売も繁盛して、しあわせに暮らしとるって。……父さん、心配せんでもええちゃ」と叫んだ。

夫の「……はる」という言葉の断片が、別れた先妻を指していることを、千代は確信していた。ぬぐってもぬぐっても千代の顎を伝って涙がしたたり落ちた。

〔螢〕

自分たちよりも先妻の名前を呼んだと思つた時、千代は動揺する。酒井英行氏は、重竜の「春枝への罪滅ぼしをしているかの言動」とか、「竜夫の母親が春枝であつてくれたなら、という強い思いがあつたはず」<sup>(13)</sup>と指摘する。おおむねその通りだが、疑問の点もある。

後日、春枝の弔問を受けて、千代はその裕福そうな暮らしを察して、次のように思う。

あれは春枝ではなく、じつはもつと他のことを指していたのかもしれないという気もした。千代にとって重竜は、常に己の胸の内を言葉にしてさらしながら、そのじつ決して本心を明かさぬ人であつたように思えた。

〔螢〕

では、重竜の言い残した「……はる」とは、何を意味するのか。それは、春枝の竜夫への態度やセリフ、特に、高岡駅での別れの際の様子から推測される。

春枝は列車の窓から両手を出して竜夫の腕をつかんだ。そして顔をくしゃくしゃにし、涙声で言つた。

「おばちゃんのできることは何でもしてあげるちゃ。商売が何ね、お金が何ね。そんなもんが何ね。みんなあんたにあげてもええちゃ……」

春枝は泣きながら紙きれに自分の住所を書きつけて竜夫に渡した。（中略）列車が走り出すと、竜夫は小走りですわいていった。

「また逢おうねエ、また逢おうねエ」

春枝が叫んでいた。

〔螢〕

なぜ春枝は、これほどまでに後妻の子供に愛情を示すのか。実は春枝は、竜夫と初対面ではなく、彼が二歳のときに会っていた。

私も二人と一緒に金沢の駅前で夕ご飯食べたがや。ほんとの



夫婦、ほんとの親子みたいにしてご飯を食べると、私はもう  
たまらんど哀しいなってきた……。（螢）

だが、二歳の竜夫を連れた重竜が、「これがわしの一粒種よ、そう  
言うて嬉しそうにひとつた」のを見てみると、春枝は「なんやアホ  
らしいやうな」る。子どものいない彼女は竜夫に、自分の「子ども」  
を見たのかもしれない。時が流れて、「なんや夢みたいやねえ」と  
いう彼女のつぶやきから、離婚の際の生々しい苦しみは消えている。  
しかも、眼前の竜夫は若いときの重竜によく似ている。彼女は竜  
夫を「覗き込んだ」・「じっと眼鏡越しに竜夫を見つめていた」・  
「黙っていつまでも竜夫に視線を注いでいる」・「何も語らず、竜夫を  
見つめつづけるばかりだった」。彼女は重竜に愛情を持ち続けてお  
り、竜夫にも愛情を持つのではないか。

そういう春枝の気持ちに分かるから、竜夫の行く末を頼めと、重  
竜は言い残したのではないか。これは何年も会わなかった大森を信  
頼して、竜夫に金を借りに行かせたのと同じであり、大森はその信  
頼に依えて、竜夫に無利子・無期限で金を貸す。竜夫の行く末を重  
竜は気にしており、竜夫の幸せは、結局、千代の幸せに通じる。重  
竜は竜夫や春枝のみならず、千代をも彼なりに愛している。

#### 四 竜夫と英子

では、もう一組の竜夫と英子はどうか。二人は小学生までは仲良  
しであり、竜夫は英子の家にもよく遊びに行っていた。が、中学に

入ってからは「急に口も聞かなくなった」。竜夫は英子を忘れたので  
はなく、逆に思いが深まり、秘かに彼女を性欲の対象としていた。  
彼は英子あての手紙を、何度も書いている。

けっして他人には読まれたくないような恥ずかしいことが、言  
葉足らずの文面に溢れている。いや、手紙だけではなかった。  
机の中には、もつとほかにも見られたくないものがいっぱい  
まっていた。それは熱を秘めて油臭く、魅力と自虐に富んでい  
る。（雪）

友人の関根圭太が英子を好きだと告白したのも、竜夫の英子への  
思いを深める。

「英子は、ええ匂いがするがや」（中略）

「熱情的やのオ、英子のフェロモンは、熱情的やのオ」（雪）

関根の言葉は性的だが、素直である。彼は英子の写真を盗み、竜  
夫はそれを羨んでいたが、友情のしるしとして貰う。関根は、竜夫  
の英子への思いを感じていたのだろう。彼は、英子と竜夫を大事に  
思っている。

「友情のしるしやが。……これからずっと俺と友だちでおるちゃ。  
ずっと、おとなになっても、ほんとの友だちでおるちゃ。ええ  
か？」（……うん）（桜）

関根が用水路で水死しなければ、重竜と大森のようにいい友だちであり続けたらう。彼の死後、竜夫は自分の臆病さを反省し、英子を螢狩りに誘うため、声をかけようとする。

その直前に、水飲み場でクラスの女生徒に、「いまそこで英子ちゃんも水飲んだがや。英子ちゃん、きつと喜ぶわア……」と言われ、彼は「顔を火照ら」せ、授業中に「英子を何度も盗み見」る。女生徒は英子の気持ちを察して言ったのだろうが、それまで英子と竜夫の間には何もなく、唐突の感がある。<sup>(14)</sup>

いずれにしても竜夫は勇気づけられ、英子を螢狩りに誘う。彼女も、小学生の時に聞いた銀蔵の螢の話を覚えていて、行きたいと言う。話しているうちに竜夫は、関根の盗んだ写真を自分が持っていることを話す。

やがて父の葬式が終わり、螢狩りの日が近づく。竜夫は、英子の家に螢狩りの許可をもらいに行く。家で会った英子は学校と違い、「小学生のころのあの親しさを漂わせていた。」

母の初子は初め難色を示すが、竜夫は自分の母も行くことを嘘をつき、許可をもらう。喜んだ英子は「雨、降らんようにお祈りするちゃ」と言う。「そんな英子は、ひどくおとなびていた」。彼女は、竜夫と行く螢狩りに興奮したのだろう。

英子は珍しく自分からいろんなことを話しかけてきた。竜夫が帰ろうとすると、英子は、「関根くん、泥棒やが」

そう言って竜夫を睨んだ。英子は耳まで赤くなっていた。

「写真、返すちゃ」

竜夫も赤くなって答えた。

「そんな友情、聞いたことないちゃ」

そして英子は下を向いたままいつまでも顔をあげなかった。

〔螢〕

英子の竜夫への恋心が窺われる箇所である。考えてみれば、螢狩りは銀蔵や千代が一緒だとしても、竜夫と英子にとっては初デートである。

## 五 螢 狩 り

螢狩りの当日、英子たちは早めに竜夫の家に来る。

うしろに腕を廻して、英子は恥かしそうに母親の背後で立っていた。黄色い小花を散らしたワンピースは、英子の色白の肌によく映えた。その女らしさには、自分よりもっと遠くのものを知っているような風情が宿っていて、竜夫は一目で気遅れしてしまった。

〔螢〕

母の初子が「年頃の娘を持つと、神経質になってしもうて」と言うように、母の目から見ても、英子は「別嬪」で成熟への過程にある。しかも、今日は好きな男子とのデートであり、彼女は一層綺麗になる。前述した千代の感想「楽しそうに銀蔵に問いかけている英子のすつかり娘らしくなった胸や腰を見ていると、千代はそこに何



かしら恐ろしいものを嗅ぐような気がして目をそらしてしまった。」―も、美しい女が男たちの思慕や欲望の対象となること、そして、それに対応する女の性（さが）を知っているからであろう。

一行は蛍狩りに出発するが、なかなか蛍とは出会わない。彼らが歩く土地や天候は美しく描かれるが、千代は歩くのに疲れ、時間が遅くなったことを懸念する。「来た道をまた歩いて帰ることになるから、早いこと引き返さんと……」と言うと、英子は「なァん、遅うなつてもかまわんちゃ。……まだ蛍の生まれよるところまで来たらんのに」と言い、あと千五百歩歩くことになる。その時、「出逢うかどうかからぬ一生に一遍の光景に」出会えば、大阪に行こうと千代は未来を賭ける。同様に、英子も蛍の遭遇に竜夫との恋を賭けたのかもしれない。

その甲斐があつて、四人は蛍の大群と出会う。しかし、「それは、四人がそれぞれの心に描いていた華麗なおとぎ絵ではなかった。」

蛍の大群は、滝壺の底に寂寞と舞う微生物の屍のように、はかりしれない沈黙と死臭を孕んで光の澱と化し、天空へ天空へと光彩をばかしながら冷たい火の粉状になって舞いあがっていた。

四人はただ立ちつくしていた。長いあいだ、そうしていた。

（中略）

この切ない、哀しいばかりに蒼く瞬いている光の塊に魂を注いでいると、これまでのことがすべて嘘ではなかった、そのときそのとき、何もかも嘘ではなかったと思ひなされてくるのである。

る。

〔蛍〕

千代は蛍の「光の塊に魂を注いでいる」と、これまでのことを嘘ではないと思う。蛍の大群が見る者を圧倒し、魂を揺さぶったのである。それは「宿命」感へと通じる。他の三人も同様である。

竜夫たちの生は、「貴種流離譚の枠組みを借り」つつ、「力強い『再生』ではないが、無気力に流されるだけの哀しい生でもな」く、「流れながらもささやかな幸せを求める生」<sup>(15)</sup>（渡辺善雄氏）である。圧倒的な（死を含む）美が、彼らに力を与え鼓舞する。

そして、蛍の大群の壮大な交尾故に、それは性的な面でも力を持つ。年寄りの銀蔵ですら「熱にうかされているように、心なしか喘いでいた。」若い二人はより影響を受ける。

竜夫は蛍の群れに近づこうとして、英子は彼のベルトを掴み止めようとするが、竜夫は進み、彼女は付いていく。

間近で見ると、蛍火は数条の波のようにゆるやかに動いていた。震えるように発光したかと思うと、力尽きるように萎えていく。そのいつ果てるともない点滅の繰り返しは何万何十万と身を寄せ合って、いま切なく侘びしい一塊の生命を形づくっていた。

〔蛍〕

竜夫たちも、蛍たちの生命の動き―交尾―と共振し始める。

英子はまだずっと竜夫のベルトを握りつづけたままであった。

竜夫は英子に何か言おうとしたが言葉にならなかった。彼は体を熱くさせたまま英子の匂いを嗅いでいた。

〔蜚〕

性が発動し、彼らは近づく。そういつた二人に、一陣の強風が蜚の光をまきあげ、「波しぶきのように二人に降り注いだ。」

英子が悲鳴をあげて身をくねらせた。

「竜っちゃん、見たらいややア……」

半泣きになって英子はスカートの裾を両手でもちあげた。そしてばたばたとあおった。

「あっち向いとつてエ」

夥しい光の粒が一齐にまとわりついて、それが胸元やスカートの裾から中に押し寄せてくるのだった。白い肌が光りながらぽつと浮かびあがった。竜夫は息を詰めてそんな英子を見ていた。

〔蜚〕

英子の「白い肌が光りながらぽつと浮かびあが」る。この作品でもっとも官能的なシーンである。(この時、竜夫は蜚によって光らなかったのだろう。) 見方によっては、光る蜚たちに犯される如き英子ではあるが、次の描写によって、英子と蜚は同化する。

蜚の大群はざあざあと音をたてて波打った。それが蜚なのかせせらぎの音なのか竜夫にはもう区別がつかなかった。このどこから雲集してきたのか見当もつかない何万何十万もの蜚たち

は、じつはいま英子の体の奥深くから絶え間なく生み出されていくもののように竜夫には思われてくるのだった。

〔蜚〕

蜚の大群は、「はかりしれない沈黙と死臭を孕んで光の澱と化し」、交尾を繰り返す。英子は蜚に侵入され、「体の奥深くから」光を生み出す。英子は、蜚たちを生む〈母〉となる。「蜚」と英子の一体化であり、英子にとっては、魂と肉体の一種の浄化である。この時、性と生が同次元のものとなり、英子は光輝く。だが、それは美しいばかりではなく、死をも孕んでいる。

千代が英子の姿を見る。

木の枝につかまり、身を乗り出して川べりを覗き込んだ千代の喉元からかすかな悲鳴がこぼれ出た。風がやみ、再び静寂に戻った窪地の底に、蜚の綾なす妖光が人間の形で立っていた。

〔蜚〕

千代は「かすかな悲鳴」を上げる。それは人間の形の光に驚いただけではない。英子の肉体に「何か恐ろしいもの」を見る彼女は、それが「妖光」たることを感知したのである。悪阻に苦しみ、早朝、川のたもとで吐き続ける女の死と生の間にある性が、「蜚の綾なす妖光が人間の形で立」つものを見る。そこでは死や性も光っていて、美——性——死という関係が直感される。

英子の像は、千代によって現実に取り戻されるが、竜夫にとって美や生(性)の象徴であろう。たとえそれが死を含む性であった

としても、そして、死と生のドラマ―螢の乱舞―が「宿命」と化し、彼らの前に立ち現れてくるとしても、前述の如き人生の肯定として、彼女らの前にある。彼らは奇蹟と遭遇することによって、生きようとする。

その時、竜夫は英子を愛しているだろうか。彼は彼女の生（性）や美に、心を揺らす。子どもの世界から大人の世界（性の世界）へと高められ、愛情が発動するのかもしれない。

英子は自分の美や生（性）の存在を螢たちに促され、新しいステージに立とうとする。死を孕むとしても、性は生であり、美として存在する。最終場面では、英子は竜夫を愛することが暗示される。

まとめて言えば、英子は死と生（性）の光に輝き、竜夫は美や性の中に、生の象徴を見る。そして、千代は生（性）と共存する死を見る。彼らの生（哀歎）は、死や性によって深まる。螢の美と性（生と死）の乱舞によって、人生を宿命の如く与えられ、人間は愛し生き続けていく。その時彼らは、生・性・死・美の饗宴たる「螢川」を流れて行く。

（注）

（1）（2）（3） 中村光夫や安岡章太郎の選評、および宮本輝の「受賞のことは」は、『文藝春秋』三月号（一九七八・三）による。

（4） 鎌田均「『螢川』 生きる意味を訪ねて」、『新しい作品論』へ、〈新しい教材論』へ6』右文書院 一九九九・七

（5）（6）「『螢川』の成立事情に関しては、渡辺善雄氏の『『螢川』の生成 父の発見』が詳細に論じている。

『新しい作品論』へ、〈新しい教材論』へ6』右文書院 一九九九・七

（7） 安藤始「宿命と永遠―宮本輝の物語―」（おうふう 二〇〇三・十）

（8） 酒井英行「宮本輝論」（翰林書房 一九九八・九）

（9） 注（5）による。

（10）（11）（12）（13） 注（8）による。

（14） 主人公が女たちに好意を持たれるのは、川三部作の残りの二作も同様であり、中学生の主人公が、好きな美少女から好意を持たれるのは、「錦繡」も同じである。ここには、主人公の魅力の保証とともに、渡辺氏の言う「貴種流離譚」の性格もあろう。「錦繡」の有馬は、都会（大阪）から田舎（東舞鶴）にやって来た転校生であり、父母を亡くし孤独である。竜夫はそれほどではないが、大阪からやってきて、父を亡くし、やがて大阪に帰る。

（15） 注（5）による。

〔二〇一二・九・二七 受理〕